

# がんピアサポーター養成研修前後における 受講生のピアサポーター像の変化

伊藤 奈美・別所 史恵・坂根可奈子・平野 文子  
三島三代子・石橋 鮎美・安食 里美

## 概 要

がんピアサポーター養成研修前後の受講生が描くピアサポーター像を明らかにし、研修の成果と課題を検討することを目的に質的に分析した。研修前後とも【コミュニケーション技術】【ピアサポーターとしての心構え】【ピアサポーターとしての存在意義】【期待される社会的役割】の4カテゴリーに分類された。研修後はがんピアサポーターに関する内容の多様化、および表現の具体化が見られた。がんピアサポーターに求められる知識や技術、対等な立場で共に考える姿勢、ピアサポーターの自覚と責務が醸成され、研修成果を得たと考えられる。今後は最新のがん知識を取り入れたカリキュラムの更新、受講生への心理的支援の必要性が示唆された。

キーワード：がん, ピアサポーター, 養成研修, 研修評価, ピアサポート

## I. はじめに

日本人の約2人に1人はがんに罹患する現状から(がん情報サービス, 2015), がんは誰もが罹患する可能性があると言える。統計的には特異な疾患ではないものの, がん患者や家族にとってはいまだ深刻な病気に変わりはなく, がんと診断された時から不安や悩みは尽きないと考えられる。

2012年に見直された国の「がん対策基本計画」(厚生労働省, 2012)は, 「がんに関する相談支援と情報提供」を目標の一つに掲げている。がん患者とその家族の悩みや不安の軽減のため, がん経験者によるがん患者の相談支援が求められていることから, ピアサポート実施に向けた研修など, がん患者・経験者との協働とピアサポートの充実に努めるように盛り込まれた。

A県においても, ピアサポートによるがんに関する相談支援と情報提供の充実を図るため, がんピアサポーターの養成を目的とした研修

が平成23年度から着手された。A県がんピアサポーター養成研修は, A県において初めての取り組みであった。そこで受講生に研修前後で「私の描くピアサポーター像」を記述してもらい, 受講生のがんのピアサポーターに対する理解や姿勢およびその変化について確認した。

福祉・保健・医療・教育の領域でピアサポートの導入や実践は行われており(大石ら, 2007), 全国的にもがんの経験を持つ者による相談支援や情報提供の取り組みが広がりつつある。しかし, がん患者等を対象としたがんピアサポーター養成のカリキュラム構築や効果を検証した国内の研究や報告は, 現在ほとんど見当たらない。

本稿では, がんピアサポーター養成研修前後の受講生が描くがんピアサポーター像の変化を明らかにし, がんピアサポーター養成研修における成果と課題を検討する。

## Ⅱ. 用語の定義

### がんピアサポート

ピアサポートとは、ピア (Peer) という同じような立場の人々、当事者同士がサポート (Support) するという当事者による支援・援助のことである。がんピアサポートとはがん領域における当事者によってがん患者を支援することである。

### がんピアサポーター

がん領域において当事者による支援の実践者のがんピアサポーターと言う。本研究では、当事者をがん患者とする。

## Ⅲ. A県がんピアサポーター養成研修の概要

A県がんピアサポーター養成研修 (以下、研修とする) の目的は、がんを体験した当事者が自身の体験を活かし、医師・看護師・がん相談員等の医療の専門家と連携を図りながら、がん患者や家族の闘病生活を支えるための新たな支援の担い手として、活動に携わる人材を養成することである。がん患者と同じ立場に立ち、悩みや不安の傾聴に努め、共に問題解決の糸口を探す役割を果たすべく、がんピアサポーターに必要な知識と技術を習得することをねらいとした研修である。研修カリキュラムを表1に示す。がん体験者を対象とし、①基礎・実践講座6回、②がん種別講座9分野、③見学実習、④相談実習の計40時間実施した。

基礎・実践講座では、がんに関わる基本的な知識および聴くことを中心としたコミュニケーション技術の習得を目指し、講義・演習を行った。がんピアサポート概論やがんを取り巻く医療制度、がん患者が抱える心と体の暮らしの問題、ピアサポーターの基本対応等について、がん相談員、緩和ケア認定看護師、現在活動中のがんピアサポーター、医師等を講師に学習した。相談対応の中心となるコミュニケーションに関しては、ロールプレイも取り入れ、実施毎に振り返りを行った。

がん種別講座は、大腸、胃、肺、乳房、子宮の5大がんに加え、A県がん登録データから罹患率の高い肝臓、血液、前立腺の計8種類のがん種について、専門の医師による講義を実施した。講義内容は、各がん種の定義、症状と治療、検査データを中心とし、最近の治療等の動向も加えて学習した。がん種別講座の最終には「緩和ケア」を設け、緩和ケアの理解を図った。

見学実習では、がん相談員とがんピアサポーターの役割の違いを理解するため、がん診療連携拠点病院等へ赴き、がん相談支援センターの役割やがん相談員との連携を学習した。また病院内のがん相談支援センター、院内がんサロン、緩和ケア病棟、外来化学療法室等の施設見学を行った。相談実習は、実践を通じたがんピアサポーターとしての相談対応技術を習得することをねらいに、模擬事例の対応を実施後、ファシリテーターからグループ毎にフィードバックした。

がんピアサポーターの修了認定は、相談対応の実技試験と筆記試験により行った。

平成24年度および平成25年度の研修は県内在住のがん体験者を公募し、合わせて20名が受講した。

## Ⅳ. 目的

平成24年度および25年度に実施した研修前後の受講生が描くがんピアサポーター像の変化を明らかにする。

## Ⅴ. 方法

### 1. 研究対象者

平成24年度および25年度の研修を受講した20名

### 2. データ収集方法

研修の開始時と終了時に記載する課題レポート「私の描くピアサポーター像」(1000字程度)をデータとした。

### 3. 分析方法

研修前後で、がんピアサポーター像の記述を文脈から読み取り、コード化した。コード化し

表 1 A県がんピアサポーター養成研修 カリキュラム

【前期プログラム】				【後期プログラム】					
講座	科目【ねらい】	内容	授業形態	研修時間	講座	科目【ねらい】	内容	授業形態	研修時間
1	1. アイスブレイキング 【参加者同士の交流を深める】 2. がんのピアサポーター概論 【がんのピアサポーターに関する基本的な事柄を理解する】	自己紹介 1)がんのピアサポーターの定義・意義(必要性) 2)ピアサポーターの活動内容(役割) 3)ピアサポーターの心得 4)グループワーク ・「私の描くピアサポーター像」 《制度編》 1)がん医療の現状と課題 2)国・県の「がん対策」 《医療編》 3)がんの3大治療 4)治験と臨床研究について 5) Total pain、緩和ケア 《暮らし編》 1)がん患者の身体的・心理的特徴 2)がん患者の社会的特徴と問題解決のための社会資源の活用 1)患者の目から見たがん治療の仕事 2)がん患者が知っておくべき自分の「がん」のこと 3)情報リテラシーについて (1)ピアサポーターにおける情報活用 (2)島根県における情報活用の実践 4)がん患者のセルフケア・セルフサポートの支援 5)がんサバイバーシップとは 6)グループワーク 1)コミュニケーションの基本 (1)コミュニケーションとは？ (2)コミュニケーションの方法 (3)コミュニケーションの技法 2)ピアサポーターの基本スキル (1)アクティブリスニング(積極傾聴)の基本 (2)グループワーク	講義 講義 GW	45分 80分	5	7. ピアサポーターの基本対応① 【がんのピアサポーターに必要な心得と対応を理解する(倫理的に遵守すべき事柄を理解する)】 【相談対応技術を理解する】 【記録の書き方を理解する】	1)ピアサポーターの心得と対応基準 2)ピアサポーター活動の日頃の備え 1)ピアサポーターの基本的対応 2)相談対応ロールプレイ1 1)ピアサポーター相談記録の書き方	講義 演習 講義	260分
2	3. がん医療と医療制度の基礎知識 【がん患者を取り巻く医療・制度に関する基礎とその背景を理解する】 4. がん患者が抱える心と体と暮らしの問題 【がん患者が抱える心身と暮らしの問題を理解する】	《制度編》 1)がん医療の現状と課題 2)国・県の「がん対策」 《医療編》 3)がんの3大治療 4)治験と臨床研究について 5) Total pain、緩和ケア 《暮らし編》 1)がん患者の身体的・心理的特徴 2)がん患者の社会的特徴と問題解決のための社会資源の活用 1)患者の目から見たがん治療の仕事 2)がん患者が知っておくべき自分の「がん」のこと 3)情報リテラシーについて (1)ピアサポーターにおける情報活用 (2)島根県における情報活用の実践 4)がん患者のセルフケア・セルフサポートの支援 5)がんサバイバーシップとは 6)グループワーク 1)コミュニケーションの基本 (1)コミュニケーションとは？ (2)コミュニケーションの方法 (3)コミュニケーションの技法 2)ピアサポーターの基本スキル (1)アクティブリスニング(積極傾聴)の基本 (2)グループワーク	講義 講義	1)2)15分 3)4)80分	6	7. ピアサポーターの基本対応② 【相談対応技術を習得する】	相談対応ロールプレイ2	講義 演習	140分
3	5. よりよい治療と療養のための「がん患者学」 【自律(自立)した患者となるための支援の方法を先進地におけるピアサポーターの先駆的な実践活動を通して理解する】	1)患者の目から見たがん治療の仕事 2)がん患者が知っておくべき自分の「がん」のこと 3)情報リテラシーについて (1)ピアサポーターにおける情報活用 (2)島根県における情報活用の実践 4)がん患者のセルフケア・セルフサポートの支援 5)がんサバイバーシップとは 6)グループワーク 1)コミュニケーションの基本 (1)コミュニケーションとは？ (2)コミュニケーションの方法 (3)コミュニケーションの技法 2)ピアサポーターの基本スキル (1)アクティブリスニング(積極傾聴)の基本 (2)グループワーク	講義 GW	90分 90分 260分	1	【がん治療およびそれぞれのがん種別の基礎知識を理解する】	1)大腸がん 2)胃がん 3)肺がん 4)乳がん 5)子宮がん 6)肝臓がん 7)血液がん 8)前立腺がん 9)緩和ケア 1)がん診療連携拠点病院におけるがん相談員の役割 2)がん相談員との連携 3)病院内見学	講義	90分 60分 60分 60分 60分 60分 90分
4	6. がんのピアサポーター実践論 【がんのピアサポーターに必要なコミュニケーションの基本を学ぶ】	1)コミュニケーションの基本 (1)コミュニケーションとは？ (2)コミュニケーションの方法 (3)コミュニケーションの技法 2)ピアサポーターの基本スキル (1)アクティブリスニング(積極傾聴)の基本 (2)グループワーク	講義 演習	1)120分 2)140分	2	1. 見学実習 【がん相談員とピアサポーターの役割の違いを理解する】 2. 相談実習 【実習を通して相談対応技術を習得する】			120分(平日)
【修了試験】									
1						筆記試験			・講義・演習終了後に実施
2						相談実技試験			・相談実習終了後に実施

た内容を類似性・相違性に基づいて分類した。

分析内容の信頼性を確保するために、複数の共同研究者間で意見が一致するまで検討を重ね、内容の吟味と検討を繰り返した。

#### 4. 倫理的配慮

島根県立大学出雲キャンパス研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号94)。受講生に研修修了認定後、研究参加協力を依頼した。研究への協力は自由意思に基づくものとし、協力の有無により不利益を受けることはないこと、本研究の協力後でも協力辞退を申し出ることができること、レポートは個人が特定されないように匿名化して扱うこと、得られたデータは厳重に管理すること、結果を学会等で公表することなどを、口頭と文書で説明し、署名により同意を得た。

## VI. 結 果

### 1. 対象者の概要

研究対象者は、研修を受講した者のうち、研究同意が得られた男性5名、女性15名、計20名のがん体験者である。年齢は40歳代3名、50歳代8名、60歳代7名、70歳代2名であった。対象者の体験したがん種は、乳がん8名、複合がん3名、胃がん2名、大腸がん2名、その他のがん種5名であった(表2)。

### 2. 研修前のがんピアサポーター像

研修前のピアサポーター像を表3に示す。研修前は110コードが抽出された。さらに26サブカテゴリーに分類され、【コミュニケーション技術】【ピアサポーターとしての存在意義】【ピアサポーターとしての心構え】【期待される社会的役割】の4カテゴリーに分類された。以下、カテゴリー、サブカテゴリー、コードについて、順に【】、<>、「」で表す。

【コミュニケーション技術】では、<傾聴する><思いに寄り添う><考えを押し付けない><共に考える><相談者自身が考える手助けをする>等の必要性を受講生は研修前から認識していた。研修前には、相談者に関わる際には<体験に個人差があることを認識する>こと、時

には相談者の<笑顔を引き出す>ことが求められると考えていた。

【ピアサポーターとしての存在意義】では、受講生は「自分の体験をがんで悩んでいる人々に役立てたい」と<自分のがん体験を活かす>ことを望み受講していた。<不安を軽減する><希望が見出せるよう支援する><仲間として身近な存在となる><相手のニーズに応える><思いを吐露する場を提供する>ことなどを、がんピアサポーターの役目と認識していた。一方、「副作用や合併症が出現してもそのうち消えるものもあったと伝える」「知識に裏付けられた実体験のみを話す」「自分が体験していない事や感じなかった事はアドバイスできない」と、自身のがん体験を伝えることに重きを置いた記述もあった。また研修受講やがんピアサポーターの活動をすることは、<自分自身を成長させてくれる>機会と捉えていた。

【ピアサポーターとしての心構え】では、受講生はがんピアサポーターとして、「あるがままの相談者を認めて相談者が安心できる存在」になり<信頼を得る>ために、<がんに関する正しい知識を得る><活動ルールを遵守する><対等な立場で対応する><自己研鑽し続ける>などの意思を持ち研修に臨んでいた。また、「自分自身も当事者として病気と向きあうことを覚悟しなければならない」と、相談者に<向き合う覚悟を持つ>ことを自覚していた。

【期待される社会的役割】では、<他職種と連携する><医療チームの一員となる><情報提供をする>などのがんピアサポーターとしての役割を意識した上で研修を受講していた。また、「場所や時間帯を選ばず相談対応する」ことが

表2 対象者の概要

属性		n=20 人数
性別	男性	5
	女性	15
年齢	40歳代	3
	50歳代	8
	60歳代	7
	70歳代	2
がん種	乳がん	8
	複合がん	3
	胃がん	2
	大腸がん	2
	その他	5

※その他:肺, 前立腺, 胆嚢など

表3 研修前のがんピアサポーター像  
n=110

カテゴリー	サブカテゴリー
コミュニケーション技術	傾聴する
	思いに寄り添う
	考えを押し付けない
	共に考える
	相談者自身が考える手助けをする
	思いを受け止める
	笑顔を引き出す
	体験に個人差があることを認識する
	思いを尊重する
	ピアサポーターとしての存在意義
不安を軽減する	
希望が見出せるよう支援する	
仲間として身近な存在となる	
自分自身を成長させてくれる	
相手のニーズに応える	
思いを吐露する場を提供する	
ピアサポーターとしての心構え	信頼を得る
	がんに関する正しい知識を得る
	活動ルールを遵守する
	対等な立場で対応する
	自己研鑽し続ける
	向き合う覚悟を持つ
期待される社会的役割	他職種と連携する
	医療チームの一員となる
	情報提供をする
	サービス精神をもつ

■ 研修前みのサブカテゴリー

できるように「サービス精神をもつべき」という、がんピアサポートをサービスのひとつと捉える考えも研修前にはあった。

### 3. 研修終了後のがんピアサポーター像

研修後は147コードが抽出され、28サブカテゴリーに分類された。さらに【コミュニケーション技術】

表4 研修後のがんピアサポーター像  
n=147

カテゴリー	サブカテゴリー
コミュニケーション技術	共に考える
	思いを尊重する
	思いを受け止める
	思いに寄り添う
	傾聴する
	相談者自身が考える手助けをする
	考えを押し付けない
	要約する
	思いをくみ取る
	背景をふまえる
	しぐさや態度で表現する
	客観的に対応する
	相談者が話せるまで待つ
ピアサポーターとしての心構え	対等な立場で対応する
	自己研鑽し続ける
	がんに関する正しい知識を得る
	発言に責任を持つ
	信頼を得る
ピアサポーターとしての存在意義	活動ルールを遵守する
	向き合う覚悟を持つ
	自分のがん体験を活かす
	相談してよかったと思ってもらう
	思いを吐露する場を提供する
	ピアサポーターの活動を通して勇気づける
仲間として身近な存在になる	
期待される社会的役割	他職種と連携する
	医療チームの一員となる
	情報提供をする

■ 研修終了後の追加されたサブカテゴリー

【ピアサポーターとしての心構え】【ピアサポーターとしての存在意義】【期待される社会的役割】の4カテゴリーに分類された。結果を表4に示す。

研修後の【コミュニケーション技術】に関する記述では、研修前の「共に考える」「思いを尊重する」「思いを受け止める」「思いに寄り

添う><傾聴する><相談者自身が考える手助けをする><考えを押し付けない>に加え、<要約する><思いをくみ取る><背景をふまえる><しぐさや態度で表現する><客観的に対応する><相談者が話せるまで待つ>が追加された。

【ピアサポーターとしての心構え】は、<対等な立場で対応する><自己研鑽し続ける><がんに関する正しい知識を得る><信頼を得る><活動ルールを遵守する><向き合う覚悟を持つ>に、新たに「言葉一つ一つに責任を持たなければならない」などの<発言に責任を持つ>ことが追加された。

【ピアサポーターとしての存在意義】では、<自分のがん体験を活かす><思いを吐露する場を提供する><仲間として身近な存在になる>に加え、<相談してよかったと思ってもらおう><ピアサポーターの活動を通して勇気づける>という相談者の心理面のサポートや相談者との関係性についてのサブカテゴリーが追加された。研修前にあった<不安を軽減する><希望が見出せるように支援する><自分自身を成長させてくれる><相手のニーズに応える>等の記述は見られなかった。

【期待される社会的役割】は、<他職種と連携する><医療チームの一員となる><情報提供をする>のサブカテゴリーが抽出された。そのうち<多職種と連携する>では、研修前のがんピアサポーター像は「様々な人と連携して活動する」「専門職につなげる役目を担う」等であったが、研修後は「相談者の問題に一人で抱え込まず、必要時は仲間や他職種に援助を求める」「自分の限界を超えた相談内容は無理をしない」等、がんピアサポーターの役割と限界を認識して活動することを理解していた。

## Ⅶ. 考 察

受講生はがん患者や家族を支えるための新たな人材としてピアサポーター像を思い描き、【コミュニケーション技術】【ピアサポーターとしての心構え】【ピアサポーターとしての存在意義】【期待される社会的役割】を理解していた。また受講生のがんピアサポーターに関する理解の内

容は研修後には多様化し、表現も明確になっていた。

受講生は相談者に対して、<自分のがん体験を活かす><思いを吐露する場を提供する><仲間として身近な存在になる>ことをがんピアサポーターの役割と認識していた。これらは、同じ立場で相談者の思いが共感できる故の理解であったと考えられる。一般的にがん患者ないしサバイバーは、他のがん患者をサポートする活動、いわゆるピアサポートを通じて生きがいなどを得ることが多い(松下, 2010)。受講生の「自分の体験を役立てたい」「相談者の悩みを同じがん体験をした立場で共に考えサポートしたい」という<自分のがん体験を活かす>ことができる活動によって、<自分自身を成長させてくれる>とがんピアサポート活動に期待を寄せていたと思われる。さらに研修後の相談者に<相談してよかったと思ってもらおう>ことや<ピアサポーターの活動を通して勇気づける>ことで、【ピアサポーターとしての存在意義】を見出そうとしていると考えられる。

研修前から受講生が描いていた<共に考える><思いを尊重する><思いを受け止める>等のピアサポーター像からは、【コミュニケーション技術】の必要性を、高く意識して研修に臨んでいたことがうかがえる。その意味では、元々患者や家族の思いに気持ちを寄せる姿勢を持って研修に臨んでいたと思われる。特筆すべきは、研修後に【コミュニケーション技術】に関する記述がより具体的になった点である。研修前の【コミュニケーション技術】は、<傾聴する><思いに寄り添う><思いを受け止める>等、漠然としたコミュニケーションの必要性の認識であったと考えられるが、研修後に追加された<要約する><思いをくみ取る><背景をふまえる>等からは、【コミュニケーション技術】の理解の深化が見受けられる。例えば研修前の<共に考える>ことは、相談者の「悩みに関心を寄せる」ことであったが、研修後には、「病気や治療選択、副作用について」や「医学的情報」、「医療者とのコミュニケーション」、「がんに関する生活や経済的な悩み」などを<共に考える>ことに変わっている。このことから研修後は、具体的な相談者の悩みをイメージし、

悩みに対して相談者と共に解決の糸口を探して  
いこうとする考えに変化したと考えられる。また、「相談内容を正しく理解するため」に＜要約する＞こと、言語的および非言語的にくしぐさや態度で表現する＜ことや、相談内容や取り巻く環境などから相談者の＜背景をふまえる＞ことなど、相手の状況に合わせた対応などを理解していた。さらに、がんピアサポーターが「自分の相談対応を客観的に振り返り」ながら＜客観的に対応する＞ことをはじめとした、相談対応技術を学んでいた。

一方、がんピアサポーターとしての自覚と責務の醸成も推察された。【ピアサポーターの心構え】の中でも＜対等な立場で対応する＞ことは、研修前は「対等な立場で接する」という認識であったのに対して、研修後には「お互いに支え合い前進する」「ピアサポーターと相談者がお互いに癒しあえる」と、相談者との相互関係を求めている。大野はがんピアサポートを、「ピアサポーターにとっては今までの自己体験の整理を行い新たな気づきを得る行為であり、相談者にとっては上位-下位の関係でない、がん体験を共有する仲間から助言を受ける行為」と述べている（大野，2010）。研修当初は自分の＜がん体験を活かす＞ことが主眼にあった受講生であったが、研修を通して対等な立場で＜共に考える＞＜思いを尊重する＞という姿勢へと転換したと考えられる。この受講生の姿勢の変化は、支援に必要とされるコミュニケーションスキルの習得だけではない、【ピアサポーターとしての心構え】の芽生えであったと言える。

＜発言に責任を持つ＞というサブカテゴリーが追加されたことから、がんピアサポーターの自覚と責務が醸成されたと考えられる。がんピアサポートで語られるのはあくまで個人の経験であり一般化できるものではないこと、個人差があること、医療情報の提供には科学的根拠が必要であり、発言に責任が伴うことを留意しなければならない（別所ら，2015）。したがって、＜自己研鑽し続ける＞＜がんに関する正しい知識を持つ＞＜活動ルールを遵守する＞等についても、相談者の＜信頼を得る＞ことや誠実に対応するために求められるがんピアサポーターの責務の一部として学んだと考える。

がん支援団体における相談内容の上位項目は、「治療全般、体験者の話、情報検索」であり、がんに関する治療を含めた情報を、医療者ではなく、体験者から聞きたいという当事者ゆえのニーズがある（大野，2011）。これらのニーズに応えるべく、＜他職種と連携する＞＜医療チームの一員となる＞＜情報提供をする＞等、がんピアサポーターに【期待される社会的役割】を理解していた。その中でも＜他職種と連携する＞については、「専門家へ相談をつなげられるように連携の役割を果たす」、「がん相談員と協力する」に加えて、「自分の限界を超えた相談内容は無理をしない」ことや「相談者の問題を抱え込まず必要時は仲間や多職種に援助を求める」こと等、多様に学んでいた。

これら受講生のがんピアサポーターについての理解は、講義内容を実践に近い形で演習や実習において実施したこと、科目毎に学びを振り返りながら学習したことによる成果であると考えられる。また、がん相談員、緩和ケア認定看護師、現在活動中のがんピアサポーター、医師等、多岐にわたる講師により、がんピアサポーターの役割について多面的に学習したことは、受講生のがんピアサポーター像の確立に影響を及ぼしていると考えられる。特に【コミュニケーション技術】は、研修において重点を置いて進められたところである。相談者は、同じ経験を持つ者から、経験に基づく困難への対処や生活上の工夫などの知恵について聴くこと、あるいは気持ちについて話を聴くことにより、具体的なイメージ、情報や安心を得ることができる（石川，2012）。しかしながら相談者は不安と混乱の中にあり、相談に来るまでには葛藤があることも少なくない。そこで研修では、不安や苦悩の中にある相談者のあるがまを受け止めることについて、繰り返し学習するカリキュラムとなっていた。ともかく相談者の話をよく聴くこと、相談者が主体でありあくまでがんピアサポーターは問題解決の手助けであること等が随所に盛り込まれたカリキュラム内容は、【コミュニケーション技術】の理解に効果的であった。それと同時に、がんピアサポーターとしてのあり方も問われる内容であったと考える。研修を通して受講生は、がんピアサポーターに必

要な知識や技術だけではなく、がんピアサポーターに求められる姿勢も含めて、幅広く習得できたと評価できる。

今後のがんピアサポーター養成研修における課題も示唆された。がんピアサポートには、悩みや不安を抱えたがん患者や家族が、がんピアサポーターを信頼し安心して相談できる体制が求められる。そのための＜がんに関する正しい知識を得る＞こと、＜自己研鑽し続ける＞ことの重要性を受講生は認識している。医療技術の進歩は日進月歩であるため、最新のがんに関する知識の習得に向けたカリキュラムの更新が研修の課題として考えられる。

また研修前後とも受講生は、**がんと向き合う覚悟を持つ**という決意を持っていた。現在の病状に違いはあるにしろ、相談者の苦悩に向き合うことは、時に自らのがんを取り巻く苦悩にも向き合うことにもつながると思われる。高山は、支援を提供する側、される側双方にとって安全でかつ安心して利用できる支援が提供されることの必要性を指摘している(2012, 高山)。受講生ががんピアサポーターとして安心して活動していくため、研修中からの心理的支援の必要性についても研修の課題として示唆された。

## VIII. 結 論

1. がんピアサポーター養成研修前の受講生のがんピアサポーター像は110コードが抽出され、26サブカテゴリーに分類された。さらに【コミュニケーション技術】【ピアサポーターとしての存在意義】【ピアサポーターとしての心構え】【期待される社会的役割】の4カテゴリーに分類された。研修後は147コードが抽出された。そこから28サブカテゴリーに分類され、【コミュニケーション技術】【ピアサポーターとしての心構え】【ピアサポーターとしての存在意義】【期待される社会的役割】に分類でき、受講生のがんピアサポーターに関する理解の内容は多様化し、表現も明確になっていた。
2. がんピアサポーターの対等な立場で問題解決の糸口を＜共に考える＞という姿勢の重要

性を学び、がんピアサポーターとしての自覚と責務が醸成された。研修を通して、がんピアサポーターに必要な知識や技術、態度等、幅広く習得できており、がんピアサポーター養成研修の成果を得たと考えられる。

3. 研修の課題として、最新のがんに関する知識習得に向けたカリキュラム、安心して活動するための受講生への心理的支援の必要性が示唆された。

## IX. おわりに

全国的に広がりをもたせるがんピアサポートの中で、本研究は一部のがんピアサポーター養成研修のデータであり、全国の研修カリキュラムに係わる内容や時間も様々であることから、一般化には限界がある。また、データはレポートの記述内容のみであり、記述されていないものについては分析できていない。

がんピアサポートの認知が十分とは言えない現状からも、この学びからがんピアサポーターが実践を積み、がんピアサポート活動を評価していくことが今後の課題である。

## 謝 辞

本研究に協力していただいた研修受講生の皆様に、心から感謝申し上げます。

本研究は、平成26年度鳥根県立大学出雲キャンパス特別研究費の助成(代表：平野文子)を受けて実施した一部であり、結果を第29回日本がん看護学会学術集会(2015年横浜市)において発表した。

## 文 献

- 別所史恵, 三島三代子, 平野文子, 他(2015):「鳥根県がんピアサポーター養成研修」の取り組みと1年目の評価, 第8回鳥根看護学術集会論文集, 21-26.
- がん情報サービス(2015):最新がん統計 がん罹患する確率～累積罹患リスク(2011年データに基づく), 2015-8-18,  
[http://ganjoho.jp/reg\\_stat/statistics/stat/](http://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/)



summary.html

石川陸弓 (2012) : がん患者のピアサポート,  
Modern Physician, 32 (9), 1169-1171.

厚生労働省 (2012) : がん対策推進基本計画,  
2015-8-18,

[http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/  
dl/gan\\_keikaku02.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/gan_keikaku02.pdf)

松下年子 (2010) : がん経験者 (サバイバー) の  
生き方, 現代のエスプリ, 至文堂, 517, 65-76.

大石由起子, 木戸久美子, 林典子 (2007) : ピア  
サポート・ピアカウンセリングにおける  
文献展望, 山口県立大学社会福祉紀要,  
13, 107-121.

大野裕美 (2011) : がんピアサポートの有用性に  
ついて, 看護実践の科学, 36 (2), 82-85.

大野裕美 (2010) : がん相談支援におけるピアサ  
ポートの意義—ピアの特徴に焦点を当てて  
—, 名古屋市立大学大学院人間文化研究科  
人間文化研究, 13, 11-25.

高山智子 (2012) : よりよいがん医療を提供する  
ために, 患者の支援体制であるピアサポ  
ートの必要性が増している, 新医療, 39 (9),  
18-21.

# **The Changes in Trainees' Images of Peer Supporters for Cancer Before and After Peer Supporter Training**

Nami ITO, Fumie BESSHO, Kanako SAKANE, Fumiko HIRANO,  
Miyoko MISHIMA, Ayumi ISHIBASHI and Satomi ANJIKI

Key Words and Phrases : Cancer, Peer supporter, Training,  
Training evaluation, Peer support